二〇二二年一〇月二八日

老舗なる白壁の蔵こぼれ萩　千鶴
凛と立つ汝れの俤秋惜しむ　たか子
千本の鳥居潜りて秋惜しむ　宏虎
玄関にななかまど燃ゆ湯治宿　素秀
破れはすの影もろともに池被ふ　もとこ
飛石の窪み窪みに木の実かな　素秀

二〇二二年一〇月二七日

汝れ逝くや金木犀の散る中を　満天
肩越しに釣り銭もらふべつたら市　ひのと
破れ蓮になほも無情の雨の鞭　たか子
団栗を拾ひ尻餅つく子かな　智恵子
夕焼いま大パノラマに播磨灘　きよえ
秋の日に乾く目尻のなみだ跡　むべ
巡礼の白衣染めゆく秋落暉　澄子
子ひとりに大人取り巻く七五三　もとこ
北国の土黒々と馬肥ゆる　ひのと

二〇二二年一〇月二六日

門灯の切れかけてゐる夜寒かな　ひのと
磔像に濃ゆき窓辺の秋日影　たか子
岩頭の紅葉ひときわ孤高なる　素秀
秋の日を畳みて仕舞ふ露天商　ひのと
爽やかな朝日へ水脈や漁り舟　隆松

二〇二二年一〇月二五日

十字墓隣るオリブの実のたわわ　あひる
赤い羽根欠席の子へ届きけり　ひのと
金木犀掃き終へて又ほろほろと　みきお
墨飛ばし太筆一擲文化祭　せいじ

小鳥来る古びし堂の葵紋　なつき
落葉踏みつつ舌頭に千転す　たか子
秋冷の朝告ぐ湯屋の時太鼓　澄子

二〇二二年一〇月二四日

紅き実をなお紅くして秋夕焼　あひる
十月の雨を跳ねゆくハイヒール　素秀
枯蔓の思ひの外の長さかな　明日香
リコーダー吹きつつ下校天高し　満天
飲むといふより椀啜るきのこ汁　かえる
対岸は新興団地鳥渡る　ひのと
絵硝子の彩こぼれ居て秋館　たか子
小さき手で木の実に目鼻描きにけり　ひのと

二〇二二年一〇月二三日

一面のコスモス畑村おこし　せいじ
秋晴や絶えず子の来る水飲み場　ひのと
土の香の沁みし野良着や星月夜　みきお
ハロウィンのお化けら並び飴もらふ　なつき
退院の背ナへと玉の小春かな　むべ

二〇二二年一〇月二二日

匕首の月高く残りし夜勤明け　素秀
朝まだき速歩の馬の湯気立ちぬ　澄子
蒲の穂の風に打ち合ふ湖畔かな　せいじ
聖堂の固き木椅子や秋の冷え　たか子
松茸を裂きしその指夜も匂ふ　ひのと

毎日句会みのる選・二〇二二年一一月一〇日